

自序

本書に記載する所の論文は、皆舊稿にして、表題の示すが如く、断片の漫録なれば、一貫したる主意のあるに、あらず。今より願れば、考證精もからざる所あり、推敲足らざる所ありといへども、五篇各々、其の説く所、自ら潛かに創發の見解と信ずる所のものなきに、あらず。故に之を一巻を爲して、刊行するは、聊か明治文學に寄與せんとする余が、微衷に外ならざるのみ。

明治三十一年七月

著者 大島正健識

音韻漫錄目錄

- 一、地方發音の變化及び其配布
- 二、撥音と促音
- 三、音便の説
- 四、ハヒフヘホ古音考
- 五、タナツテト古音考

音韻漫錄

大鳥正健著

地方發音の變化及び其配布

凡そ他國に移りて、長く其地に住居し、能く其言語に通じ、其使用に熟練する者といへども、最も學び難きは、其緩急抑揚の音調にありて、其差異に由り、知らず識らず、己が生國を現はすに至ることあるは、常に見る所なり。各々其郷里に於いて、小兒の時より習、覺えたる發音は、口の開き方、唇の合はせ方、舌の動かし方、皆様々異なる所ありて、其癖頑に殘り、容易に變更すること能はず。是を以て、九州音は奥、羽音に似ず、關西音は關東音に同じからず。外國語を學ぶ時に於いてすらも、各々其自國の流に隨ひて發音するが故、同一の語に對し、其響種々に分れ、之を矯正するに、語

學教師の常に大に困難を感ずるは、經驗ある者の、皆能く知る所なり。北海道の土人の如きは、中には本州人と異なる所なく、巧に日本語を操る者ありといへども、其發音を聞けば、少し聞慣れたる者は、何人といへども、容易く其の蝦夷訛たるを悟り得べし。常に諸國の人に接し、或は長く諸國を遊歴したる人は、他人の發音のみを耳にし、是は盛岡、是は仙臺、是は東京、是は名古屋、是は金澤、是は大阪、是は岡山、是は高知、是は熊本と、一々分別を立つるは、左のみむづかしき事にはあらざるべし。

若し發音の爲方、及び其緩急抑揚等を、形式に顯はす完全の法ありとせば、是に由りて、人類の地上配布の迹を探り、其往古の歴史に溯らば、只單に語根語頭語尾の關係、及び文法の組立のみによりて、類別するに比すれば、其法更に勝れる所あるべし。然れども、今日の博言學、未だ其域に達すると能はざるは、遺憾の事といふべし。有名なるグリンム氏の發音表

記法の如きは、實に斯道に一大進歩を與へたるものなり。將來此發音表記法の、尙更に精密に赴き、盛んに使用せられて、人類學の研究に、少からざる便益を與ふるに至るべきは、余の信じて疑はざる所なり。

我國の言語の發音、及び其緩急抑揚を示すに、未だ適當の法を有せず。現今使用の羅馬字の之を寫すに、甚だ不完全なる所多きは、西洋人の、一は羅馬字に由りて、我日本語を學ぶ者の、本邦人と、大に異なる發音を用ひ、聽者をして、厭々其意味の了解に苦しましむるとあるを見ても、容易に悟ることを得べし。然れども、今日の場合にては、他に良法なきを以て、不完全ながらも、發音を寫すは、羅馬字に頼らざるを得ず。余は未だ我祖先の地上配布の如き、大問題を探究する抱負、あらずといへども、今姑く羅馬字を以て、余が聞知する所の、諸方の郷音を比較し、聊か余が意見を附して、歴史研究の一助と爲さんとす。

佐行の父音

シの音羅馬字にて^シと記す。此音東京邊にては^シと^シとの間の音にて^シに近く、^シに遠し。九州、山陰、北陸には全く^シの音なる處多し。諸國概して、先づ^シの方なり。奥羽にては、此音崩れて^シでも、^シでも、^シでも區別し難し。

セの音羅馬字にて^セと記す。東京邊は此音なり。諸國又此音多し。九州の大分、福岡、佐賀、長崎、熊本、山陰の島根、北陸の石川、富山、新潟、東山の山形、秋田、青森の諸縣に、^セの音多し。即ち先生のセンセイを、^{sensei}といはずして、^{shenshei}といひ、濁音にて、錢のゼニを、^{zeni}といはずして、^{jeni}といふが如し。此音畿内にては折々現はるゝとあり。

サの音は全國通じて^サなるが如し。なれど鮭のサクを^{shake}、二味線のサミゼンを^{suaisen}、鯛饅頭のサンカウを^{sharekade}、吃逆のサタリを^{shakuri}、左

官のサクワンを^{shakwan}、蹄のサガムを^{shagamu}、石榴のザクロを^{jakuro}、戲のザル、を^{jaru}、唾のクサメを^{kushame}、乾のハサクを^{hasaku}、杓のヒサクを^{hisaku}といふが如きを見れば、^サに^シの音もあるが如し。

ソとスの兩音も、ソウデ、ゴザリマスと、シヨウ(^{sho})デロシヤ(^{sho})リマシエ(^{sho})と、強く^シ音に響かす人あるを見たり。岡山縣西北部の人と記憶す。我佐行の父音の古音を考ふるに、是は今の九州音の如く全く^シなりしならんかと思はる。昔の^シ脱落ちて其迹に^シを残し、或は^シを落して^シを残せる地方多きを以て證となすべし。^シの如き英語の綴字法は、強ちに音の標準となし難しといへども、自然の發音より、佐行拗音の方を古音と見ると適當なるべし。

畿内及び山陰山陽の東部に於いて、行き^シセンの音を行き^シヘンと響かす。大阪邊のおまヘンの如きは、特徴の音として、他國人には耳立ちて

きこゆる所なり、セの原音^セなりしが故。の落つるとききこよとなるなり。ヘンは更に^シを落してエンとなることあり、行きまへんを行きまエンといふが如し、奈良にては行きメエンといふ、西京邊にては、行きまセウを、行きまホウといふ、^シの音より^シを取れば、^シと變はるなり、尙地方に由りては、行きまヒョウと、^シ音を加へて響かす處あり、又行きなサレタを行きなハツタ、或は行かハツタといふ處あり、^シの音本シヤなりしとせば、此轉化の説明容易なり、淨瑠璃には、言はシヤル言ハシヤンスの語あり、是はサル、サンスの^シを、^シ音に響かせしなり、このいはシヤル、今は^シを落していはハルとなる、奈良邊にては、行きなサル、往になサルを、いけへール、いねへールといふ、是は行かハル、往なハルの訛なり、彼方様のあなたサマを、あんだハンといふも、^シより^シの落ちたる例なり、御前様のおまへサマを、おまハンといふが如きは、遙かに北の方、東京邊

に於ても、きく所なれど、是は畿内音の移入りて、ある階級の人々に傳播せしと思はる、理由あるなり、兒童又婦女の言に、サンをヤンといふも、シヤンに近しと知るべし、又同ヒサンをヤンと呼ぶことあり、是はサのシヤを^シとせずして、^シとなし、^シを落して、^シの形を取りたるものと見做すことを得べし。

文語の^シ音、口頭にては、屢々^シ音に用ゐらるゝことあり、仰セラルをセツシヤル、入らせラルをいらつシヤル、言はセラルをいはつシヤル、又いはシヤルといふは其例なり、是等は皆セの九州音の如く、シエなりしを確かひる證となるべし、前に出だせる鮭のサケ、シヤケ、吃逆のサクリ、シヤクリ、戯のザル、シヤレルの類は、通例直音の方を雅となし、拗音の方を俗となせど、右は直音より拗音に訛れるにあらざして、拗音の方原音なりしかも知る可らず、昔し支那音を和音に寫したるとき、拗音を殊に直

音に換へたることあり、又或は其當時記したる、我音の拗音なりしも、後變はりて直音となり、後世に至り、其變化に心付かざるものもあるべし。七質の音シチなるべきを、屢々ヒチと呼ぶは、是も又^三より^二の落ちたるものと見て可なるべきか、尤も逆にヒよりシに訛り、響かす音もあるが故、是は一概には論ずること能はず。シをヒに訛るは、最も信越地方に多し。大和にも此説あり、^二と^一の轉換は、歐洲語などにも多く見受くる所なり。

畿内及び其近傍の國の中には、其ノをホノ、其レをホレ、然ウシテをホウシテといひて、^二を^一の位置に用ゐる處あり、是も又^三の^二を落したるものと考ふるも、差支なかるべし。

さて佐行父音の^二なりしこと疑なしとせば、其音は今^二の^一の三種となりて、諸國に散布するを見るなり。

^二は出雲を中心とし、南は九州に蔓延し、東より北は、鳥取縣、兵庫縣、京都府、福井縣に於いて、暫く迹を滅し、石川縣、富山縣に於いて、再び現はれ、新潟縣には、例外あるに似たれど、大體日本海に沿ひて、奥羽に入り、其痕迹を留むるが如し。

^二は東海、東山、山陽、山陰、南海諸道の大部分に行はるゝ音なり。此等の諸國といへども、^二音に至りては、全く^二と響かす處ありや、未だ其証を得ず。^二音を用ゐる處にては、^二音なしといふにはあらず。して、通例の適合には、多く其音を用ゐるなり。

前の諸國は、拗音を嫌ふ傾向ありて、原音^二の^一を取りて、^二の方を響かすに反し、畿内及び山陰、山陽の東部、紀伊、伊勢、伊賀、近江、若狹、越前の畿内音の相混する地方に於いては、出氣音の^二を落し、平坦なる音を好み、其儘にして^二を用ゐる來れるなり。

波音は元來唇音にして、現今諸國に於いて、行はるゝが如き、唇音にあらざりしは、吾も人も知る所なれば、今重ねて繰返し、之を説明する要なかるべし。此唇音は現今のフ音の如く、口内より出づる息の、軽く唇に接して、生ずる音なり。此音羅馬字の、英の f の如く、下唇に上歯を當て、響かす音にはあらず。西洋人の、富士山、東京府等の、フ音を響かすに當り、我國人の耳には、異様にきこゆるは、これ我フ音を辨へずして、之に當て、f 音を用ゐるに由りてなり。波行の父音は、稍輕き w 音に近きが故、言の中或は下にあるときは、ハヒフヘホは、ワヰウヱヲと混するに至れるなり。而して、今は又ヰエヲとイエオと、其區別を失ひしに由り、ヒヘホは、イエオにも通ふに至る。ワ音とア音と、今も尙其區別あるは、全くアは母韻の中、其口の開き方、最も廣く、其發音最も強きに由りてなるべし。是故に唇

のハ音も、又ア音と混せざるなり。

他所にては、既に脱け、或は變はりたる波音、今も尙其儘存する地方あり。其一例、九州にて、則に對するスナハチの、ハを強く響かすが如し。熊本の人、食フといふ言の、フを出氣音にて響かすが如きも、亦波音の痕迹を留むるものと見做して可なるべし。

唇波音の地上の配布を考ふるに、遺憾ながら、余未だ材料を蒐むると多からざるが故、充分斷定を下すと能はずといへども、出雲は、慥かに其中心なり。此音、山陰の他の諸國に隠れて、北陸に至りて、再び現はれ、奥羽諸國にては、此音のみにて、ハヒヘホの喉音を有せざる地多し。此中ヒへの二音に於いて、最も然りとす。即ち百をフヒヤク、兵をフヘイといふが如し。他の諸道に於いては、概して此音なし。九州の土音には、此音ある地方ありといふ。憾むらくは、就いて正したることなきが故、其の果たして確

實なるや否や、未だ知ること能はず、余が臆測に由れば、九州に此音の存在すべきを至當とす、薩摩人に此音を響かす者あるは、親しく耳にせし所なり。

カ(カ)音及びクワ(Kwa)音

拗音のクワは、諸國に於いて、多くは直音のカと變はれり。クワ音の配布を探るに、九州に存じ、出雲になし、山陰の他處及び山陽畿内に散見し、北陸の中部より、北部に至りて、強く現はれ、又大體奥羽の西部に於いて、其力を占む、奥羽人の中には、クワのみならず、クエ、クヰの拗音を響かし得る者あり、青森縣人を最も然りとす、其クヰ音しばしばカヰ、又カヰの如くさこゆ、四國の土佐は、古語の存する地なれど、カヰクワは區別すると能はざるは、訝しといふべし。

加行濁父音(ト)及び半濁父音(ツ)

本濁音は、ガギグゴ、半濁音は、ガギグゴなり、言の上にあるときは、諸國大方は本濁音を用ゐる、此場合に、參州の人に、半濁音を用ゐる者あるを見たり、又濃州にも此音あるを見れば、參尾濃の間に、語頭の半濁音は、存在するならんか、其例は五合をコンコウ、御坐をコザルといふが如し、淡路にも、此音あるが如し、言の中又は下又は助辭には、半濁音を用ゐる處多し、萩をハギ、下髪をサゲガミ、反故籠をホクカゴ、我國をワガタニといふが如し。

本濁音のみを用ゐる地方を原ぬるに、九州一圓、四國の西部、山陰、山陽の西部及び中部、北陸の中部及び北部にして、就中越後に於いては、此音最も強くさこゆ。

畿内にては、助辭又言の中或は下にある者は、本濁なるか半濁なるか、其別甚だ聞分けがたし、再三再四正して後、漸く兩音の相混じて、併び行は

るかを疑ふに至る。山陽、山陰の東部、東海、東山、北陸の南部は、粗畿内に同じ。大和の南部を経て、紀伊に至れば、全く半濁音を用ゐざる地方ありと聞く。是は稍訝しきことなり。ガキクゲゴは鼻音なり。大和には一種の鼻音あり。羅馬字にて表はし難し。畿内の西部、及び紀伊の西南部は、其音を親しく耳にせずといへども、海峡を超えて、淡路に至れば鼻音流行し、更に渡りて阿波に入れば、愈々同音の顯著なるを見る。南の方土佐に至れば、其音更に明かにして、此地の人は、英語の *king* を、*ドック* と響かし得ずして、*ドンク* と響かすこと通例なり。故に鼻音、畿内と南海と縁故を有する音なりといふべし。

助辭又言の中或は下にガキクゲゴの用ゐる行はれて、其音の顯著にきてゆるは、東海、東山、兩道の諸國なり。東京近傍の東訛は、此音の耳立つは、他方の人の常に注意する所なり。而して是より北に進み、鼻音次第に力を増し、此類の音のみならず、遂に彼の一般鼻にかゝる、奥羽音とはなるなり。本濁音がキクゲゴは、拗音クワを用ゐる地方に多く、又佐音に山を用ゐる。波音に「を用ゐる處にては、右兩種の音大方は共存することゝ知るべし。

イドエ

越後の人曾つて余に告げて、イロハに、エ音の四つあるを語れり。余は聽きて、始の程は、其の何の意なるか、之を解すること能はざりしが、後越後には、イドエの區別なきが故、イヰエエの四音、皆同音なることを悟り、思はず之を一笑に附したることありき。かくの如く、イエに區別なきが故、言の中又下にあるヒへの、波音を失ひしものにも、區別なし。文壇に稍名を知られたる人にては、尙此誤用を免かれず。動もすれば「言へき」答ひり

なせ、書き、忽ち其生國を寓はし、何はどなく、鄙し氣に見えて、一も二もなく、讀者の輕蔑を受くるに至るは、誠に氣の毒の事といふべし。

さて其混用の行はるゝ地、如何んど考ふるに、先づ北陸は、越前邊にも其痕迹あるが如く、それより次第に北に進み、越中越後に於て甚だしく現はれ、東山に於いては、飛騨は未だ知らず、信濃より上野下野を経て、奥羽に入り、其別愈々亂るゝに至るなり。出雲の國にても、此區別疑はしど、人の語れるをきゝたれど、自ら之を耳にせしに非ざるが故、其實否は今此處に保證し難し。伊勢の國、舊桑名の藩士にも、亦此辨あるを認めたれど、其は其地の郷音として論ずるを得ざれば、此音自然の配布には關係なしといふべし。

シとス及ビチとツ

シとス、チとツの混同して、區別を立つること能はざるは、奥羽人一般の、治すべからざる癩疾病とす。シスの假名遣の區別に、丸と結の符號あり。丸とは下を圓めたるしの字をいひ、結とは輪の形をなしたるすの字をいふ。しかして其發音をきけば、シより寧ろスの方に近きが如く、其假名遣は、スをシに誤るより、シをスに誤る方多きが如し。時には其發音明瞭ならざるより、濁音にきこゆることもあり。電信文などにては、様々の笑ふべき事、シスの誤用より生ずることあり。現に死んだと濟んだ、梨苗と茄子苗との誤を生せしことありしは、余の親しく知る所なり。チとツも亦同様にして、其音チなるか、チエなるか、ツなるか、區別判じ難し。仙臺人の音にて、水といふときは、ミヂ、ミヂエ、ミツ三音の間はきこゆ。清音の道すらも、亦屢々同様の濁音にきこゆるとあり。是皆畢竟母音の響かせ方、他國人と異なる所ありてに由るならんか。南部人は、英のuをエーと響かすこと能はずして、常にヤーの如き、奇なる音に呼ぶ。又 i e u の音も、

折々相混じ、加行のキケクの三字、其使用紛れ、羅行の有りと書くべき場合に、有ルと書くことなどあるは、同地の人には珍しからぬ事なり、單に奥羽といへば、其區域甚だ廣くして、細別すれば、津輕、南部、秋田、山形、仙臺、米澤、會津、福島、各々差異ありといへども、シス、チツの區別は、一般に困難なるが如し、尤も會津、福島は此患に感染すること稍少かるべく、越後も北の方、新發田に至れば、既に同病に陥るを見る、出雲の人は、シスの別の困難なる、亦奥羽人に同じ、出雲音の、概して奥羽の音と符合する所多きは、祖先の移遷を探るに、大に注意すべき所なり。

以上は、發音の差異の、特に著く、其の行はるゝ區域の、最も廣きものを取りて、分類を試みたるなりといへども、余が見聞の狭き、或は誤れるもあべく、足らざるもあるべし、其の盡さるる所多きは、素より余の自ら承認する所なれば、只僅かに世人の熟知せる事實を擧げて、研究の方針を

示したるに過ぎず、此研究の、人類學上に及ぼす効果如何ん、また地方郷音の配布と、山脈、河流の位置との關係如何ん等の問題は、將來各地の人々の、忍耐多き、精密なる探險を待ちて、始めて解釋することを得るなり、是より以下は、其流行地の、稍範圍の狭き郷音につき、聊か其由來及び配布を正さん。

n, d, j, y 四音の轉換

n 音と d 音とは、前唇に觸るゝ、舌の位置同じく、息を鼻より洩らすと、口より洩らすとの差異なれば、此兩音屢々相轉換することあり、之を吾人が親しく知る所の漢語に徴すれば、左の如き例あるを見るなり。

男	ダン	ナン	内	ダイ	ナイ
任	デン	ニン	尼	ヂ	ニ
泥	ズイ	チイ	涅	デツ	チツ

我國語には同様の關係ありやと原ぬるに、聊か其證なりと思はるゝものは、退のノクを關東にてドクといひ、己のオンレを九州にてオドレといふ類なり、助辭のニテの同化して *nite nite* デとなるは、雅より俗に移れるなり、同様に「木の下風は寒からデ」のデも、寒からヌニテより、寒からンデに移り、又ンを落とし、寒からデとなりしものと見ることを得べし、*「テラアルベシ」*といふ語も、*テラアルベシ*と變はり、更にデとアと再び融化してダとなり、*テ*音を嫌ひて、*ル*はンとなり、*ス*を落として、シはイとなるときは結局關東音のさうダンベイとなるなり。

Si nite aru besi の *nite* は *de* となり、*deu* は *da* となり、*ru* は *ro* となり、*besi* は *bei* となり、遂に *Si dau bei* となるなり。

語尾にナとダと轉換する言あり、疑の言の中國邊にて、あるさうナといふ所を、關東にてあるさうダといふ、此のあるさうナは、あるさうニヤより轉じたるか、或はあるさうナランのランを落としたるものなるべし。又諾然の義より出でたるさうナリは、さうナと變はり、轉じてさうダとなることあり。

更に進んで發音を正せば、*d*音は、*j*音に近く、又*j*音は、*y*音に近し、*d*音と*j*音とは、*d*音は舌頭を前腭の齒の後の方に置くと、*j*音は舌の中部を、*d*音の位置より、腭の稍後の方に置くとの差異に由りて、生ずるなり、*j*音と*y*音とは、舌の位置殆ど同じく、*y*は*j*に比して、稍軽く腭に接するの差あるのみ、故に關東のさうダは、中國、四國、九州邊のさう、ヂヤ、畿内及び其近傍のさうヤとなり、斯くの如く、其原音より出で、*da, ja, ya* の三種に分れ来るなり。

西京にて居ナサレタを、*ニヤハツタ*といふ、これ r の y に移り、ナよりヤ

に轉じたるなり。しかして、サをシャに變へて、其父音を落とし、又レを詰音となせば、左の如き變化となる。

Inasareta を inashareta となし、*o* を *y* に替へ、*s* を落とし、*re* を *ra* にかふれば、其結果 *yahata* となるなり。

山陰山陽の東部、北陸の南部にては、*o* ナサレタを、*o* ナハツタといふ。畿内にも亦此發音あり。是より推して考ふるときは、此語に關しては、山城の音は、此等の地方の音より轉化したるものと見ることを得べし。ナは稍ニヤの氣味に響かし、後 *o* を落とせば、自らヤに變するなり。現に他國の人の、行かないも、*o* ナハラウといふ所を、福井邊の人は、行かないも *o* ニハラウといふ。此のも *o* ニハラウは、容易くも *o* ナハラウに轉するなり。生憎 *o* ナに *o* ヤに *o* ナ *o* ヤ 右の類もまた *o* *y* 轉換の例なるべし。

東京にてさうデスゼといふ所を、西京にてさうドスエといふ。デスもドスも、何れもニテオハスの轉なり。畿内の中部、西部、山陰、山陽の東部にては、之をダスといふ。エはゼの轉なり。ゼを *o* 音に響かすときは、ゼとエは *o* と *y* との轉換なるを知るべし。奥羽の福島、若松の地方にては、英雄をエイユウといはずして、ゼイユウといひ、雪をユキといはずして、ジュキといふ處あり。是亦同様の關係なり。

o *y* の轉換は、参考のため、左に支那語を以て示すべし。

吳音

漢音

廣東音

人	ニン (nin)	ジン (jin)	ヤン (yan)
若	ニヤク (nyak)	ジャク (jak)	エウク (yeuk)
鏡	キウ (ken)	キウ (ken)	イウ (yin)
柔	ニウ (nin)	シウ (jin)	ヤウ (yan)

日 ニチ (nit)

ジツ (jit)

ヤツ (yat)

リ音

ラリルレロの音は、九州人の困難を感ずる音なり、就中薩摩人に於いて、最も甚だしとす、即ち録をや、陸をずく、龍動をドんどんといふが如し、遙かに北の方會津にても、同様の困難ありて、適當に「リ」音を響かすこと能はず、仙臺南部邊の人は、此音に捲舌を用ゐる者あるを見れば、他國人の如く、平易に響かすこと能はざるものゝ如し、ラリルレロの發音は、同じく難事の如く見ゆれば、九州人と奥州人とは、自ら其辨に於いて異なる所あるなり、故に配布上より論じて、關係ありと斷すること能はず、抑も我國「リ」の古音は、如何なる類の音なりしか、今得て知り難しといへども、中古以來は、此音を嫌ふに至りしと見え、動もすれば之を省けること多し。

客	まらうと	まらうと
皇祖	すめらみねや	すめみねや
鳥屋	とりや	とや
退	しりぞく	しぞく
歸	かへルさ	かへさ
有也	あるなり	あなり
戲言	たはふこと	たはこと
惜	をしけれと	をしけど
心地	こゝろち	こゝち
拜	をロがむ	ぞがむ
去	さりぬる	はんぬる

又「リ」音を撥音又促音にかへたる例は左の如し。

畢 をはりぬ

をはんぬ

件 くだり

くだん

殘花 のこりのはな

のこんのはな

夜御殿 よルのたどい

よんのたどい

可有 あルべカルめり

あんべかんめり

欲 ほりす

ほつす

則 のりどる

のつどる

古書に讃良のさらら、平郡のへぐり、駿河のすルがの如く、支那のルを、我國の「に當てたるを見ても、其「音の強からざりしを推し得べし。「を避嫌ふは、曾に九州奥羽の人のみならず、諸國一般多少其傾向あり、平常用慣れて、絶えず眼前にあるものは、却て人の心附かざるもの多かるべし、今左に普通使用の語を出だして、其例を示さん。

どてロ

どて

こロげる

こける

ねはいりなさい

ねはいんなさい

どッだす

どんだす

どざいます

どざいます

どざんす

どざッす

けレを

けど

けんど

ねくれなさい

ねくんなさい

そレなら

そんなら

さうであらげな

さうぢやげな

おもひなるなよ

おもひなるなよ

やルまい

やんめい

あルべー

あんべい

なラない

なんぬい

どリかゝる

どっかゝる

やリつける

やつつける

此外「音」を捨てたるもの、中に、次の如き例あり。

わレども

わいどん

わレら

わいら

わレら

わいら

くンば(來)

こニば

「音」を避けて、撥音又促音に變ふる辨は、最も關東奥羽に多くして、殊に

耳立ちてきこゆ。

地方に由りては、「r」を態々に轉用することあり。これ畿内にて屢々耳にする所なり。和田をワラ、談判をランパンといふが如し。北陸は未だ知らずといへども、佐渡の人には同病あるなり。

ろ音

佐行の父音は、母音のイと結ぶときは、屢々脱落することあり。是も亦中古以來の辨なり。左に數例を示さん。

朝

あした

あいた

響應

もてなし

もてない

申

くし

くい

現

まして

まいて

現出

あらはしだして

あらはいだいて

此用法、足利時代の頃、頻りに流行せしと見え、能狂言には常用の音なり。現今諸國に行はるゝものより、二三の例を擧ぐれば次の如し。

塞	さむシ	さむイ
遠	どほシ	どほイ
私	わたシ	わたい
私共	わシども	わいども
擇	傘をさして行く	傘をさいて行く
談	はなシて來る	はないて來る

長州邊の人は、多シといふ言のシを、イにかふるのみならず、ホの字をもイに詭り、ホイ、といふ、是は中の音の下音に引かれたるなり。さて以上述べたるが如く、シをイといふ癖は、諸方に散見すれど、されど、此類の言は、悉く然かすといふにはあらずして、言に由りては、替ふるも

あり、替へざるもあり、其上又地方に由りて、用法の異なる處なるあるが故、其配布にかゝはりては、定則を立て難し。

又シとヒと轉換することあり、即ち七のシちをヒちといひ、人のヒとをシと、いふが如し、余はヒをシに誤るは、東京邊のみの特殊の音なりと考へ居りしが、今其の然らざるを悟れり、山陰山陽の東部、四國の愛媛邊にても、人をシと、額をシたひなど、呼ぶ風あり、只東京は、此等の諸國に比し、此癖の最も甚だしきのみ、之に加へて事の偶然に出でたるかは知らざれど、ヒをシに誤る地方にては、シをヒに誤る癖あり、十七をじふヒち、雲屋をちちやといふが如し、是は昔の三に替はりたるなるべし、總じてシのイとなるは、三の三となり、而して後又ヒとなりたるものと見て可なるべし。

ト音の其母音オを落とすことにつき、聊か心付けることあり、左に之を示す。

なんのこトぢや

なんのこツぢや

なんのこトだ

なんのこツだ

右の如く、ト音オを落として、促音となるときは、下の字の濁音を清音に替へ、撥音となるときは、濁音は其儘にして用ゐるなり、是は餘り些細の事にして、發音變化の配布には、價値或は少かるべし。

畿内にては、オの母韻を延ばして、處のトコロをトコロ、京都府のキャウトフをキャウトーフなど、響かす地方あり。

ト音につき因みに記す、加賀人のト(格別助辞のト)は、エを早く、口の内にていふが如き、一種異様の音にきこゆ、其範圍は、何れの地方にまで及ぶや、尙調査を要す。

チ、ツ、ヂ、ヅノ音

タチツテトは、父音一定の規則に従へば、其母音のアイウエオと結合すべき チ, ツ, ヂ, ヅ と響くを正當とす、チツの二音、今の如く チ, ツ と響くは、恐らくは變音なるべし、是と同じく、ダヂヅデドに屬する ヂ, ヅ も、其原音は チ, ツ なりしならん、今のツ音は、tsa, tsi, tsu, tsɛ, tsɔ の ts にして、關東俗語のトツツアン(爺様の音)、ヤツソコナフ(失敗の音)も、同類の音なり、ツは引キ据エル即ち hikiomeru の ts の、促音となりて、ts に變はり、下の ts と結びて、tsit͡sɛl 即ち hitsuetsu となりたる町の ts に同じ、チは羅馬字にて tsi と書けど、tsi と書くも左まで、我本音に遠しといふにはあらず、引キ據メ ts を、詰めて tsit͡sɛl 即ち hitsuetsu 或は hitsuetsu といふとき、tsi 又 tsi の音なり。

今のチ、ツ、ヂ、ヅの原音は、tsi, tsu, tsi, tsu なりといふは、往昔我言語を表はすに

用ゐたる、漢字の音を原ぬれば、證左と爲すべき事實ありといへども、事の煩雜に亘るを避け、其は別に論すべし。

ヂツとジツ

ムヂ(藤)とムジ(富士)ものヅキ(物着)どものズキ(物好)を混同するは、我本島一般の通病なり、獨り九州四國には、此患を感せざる地多し、此區別の、我國の南部にのみ存するは奇なりといふべし、土佐人のムヂは動もすれば、ジに紛ふ、故に山は屢々jiにきこゆ、これヂツの古音を探るに注意すべき點なりとす。

ク音

格子のかクしをかウし、朔日のつきたちをついたちといふが如く、ク音の屢々脱落するは、人の親しく知る所なり、今形状言のクの音に就いて正すに、東海、東山の中部、及び北部にては、其儘に用ゐるれど、畿内及び中國

にては、クを落とすを常とす。

關東

善

ユク

塞

さむくて

白

しろク見ゆる

美

うつくしク飾る

涉

はかばかしク進まぬ

關西

ユウ

さむうて

しろウ見ゆる

うつくしウ飾る

はかばかしウ進まぬ

關東にても、下に御坐の字のあるときば、クを落とすことあり。

宜 よろしウとざる

強 つよウとざいます

形状言のクの、ク音を落とすと、落とさざるとは、細別すれば、其範圍何れの國までに及ぶや、尙後日の探求を要す、北陸には、以上の場合に、クを落

とす地方多し。

W音

ワ井ウエヲの昔は皆W音なりしは、今更言ふまでのことにあらず。漢字を以て、我音を記し、其當時は、其音明白なりしが、何時の頃よりか、次第に變化し、遂に今日の如く、ワを除く外は、和行の音は、岡行の音と混するに至れり。然れども、是は我國全體悉く然りといふにはあらず。このW音尙青森縣には存するが如し。山陰の西部にも、現に、此音ありときく。九州と北陸の人には、未だ就いて正したることあらず。或は之あるかも知るべからず。

ユとヨ

ユとヨの混同は、越後地方にのみ、特別なりや、將た他所にも、これありや、是も亦研究を要す。ユムベとヨんべの轉化は、古くより見る所なるのみ

ならず、今も尙諸方に於いて耳にする所なり。

ユとヨの混同のみならず、越後には、オーをウーと響かす癖ある地方あり。

イ音

我イ音は、其響弱くして短きが故、西洋人の羅馬字に由りて、此音を響かすとき、我國人には、一種異様にきこゆることあり。即ち人を軽くヒトといふこと能はずして、ヒートの如く呼び、神をカミといふこと能はずして、折々カメといふが如し。

此音輕きが故、古來イは左の例の如く、父音を添へて、其に脱落つることあり。

柳瀬

やなぎせ

やなせ

時切

ときぎれ

ときぎれ

足立	わシだち	あだち
鹿	シカ	か
運	はチす	はす
口解	クチとき	くとき
埴生	はニふ	はふ
隼人	はやヒト	はやど
網引	あミびぎ	あびさ
硯	すみすり	すいり
白髪	しらかミ	しらが
鳥屋	どりや	どや

イの母韻は、波行の父音と結ぶとき、双方共に脱落ちんとして、關東と關西にて、各々特種の發音を顯はすことあり、關東人と關西人とは、其氣質

の異なりて、言語も之に従ふに由りてなるべし、爰に關西と記するは、重に畿内をいふ、山陰山陽の諸國は畿内と同類なり、此場合に、關西は延音をを用ひ、關東は促音を用ゐる。

	原語	關西	關東
買	かヒテ	かうテ	かつテ
救	すくヒテ	すくウテ	すくツテ
誓	ちかヒテ	ちかうテ	ちかつテ
習	ならヒテ	ならウテ	ならツテ
拂	はらヒテ	はらウテ	はらツテ

問ヒては、關東にて、文語にて問ウてといへど、談話にては此語を用ゐず、越後長岡の人は、買ヒては、かアてと誓かす、關東にては、他の諸國にて、文字の儘にて發音する語を、イ音を取りて促

音にかふるとあり。

擗裂	かきさく	かつつあく
打敵	うちたたく	ふつたたく
追懸	オヒかくる	オツかくる
乗越	のりこす	のつこす

又同地方にて、イ音の父音と共に落ちたる場所には、ンの音を用ゐるとあり。

劈	つきさく	つんざく
差出	さしだす	さんだす
打擲	ぶちなぐる	ぶんなぐる
逐出	たひだす	たんだす

麻行の父音と結びたる、イの落つるときは、其下の字は濁音を附するを、

諸國共に通則とす。

醉漢	のミたくれ	のんだくれ
組解	くミつはぐれつ	くんづはぐれつ
讀	よミて	よんで
飛	とビて	とんで
悅	よろこビて	よろこんで

奈行のニも又ンに替はることあり。

往	いニて	いんで
死	しニて	しんで

羅行のリの促音又撥音となるは、r音の下にて論じられたれば、今爰に説かず。此中借の字彙内中獨にては、かつてといひ、關東には、かりてといふ。是

は通例の規則に反對したる奇なる例外なり。

四十二

エイ音

清明、禮の音は、九州にては、セイ、メイ、レイと、其下の音を字の示すが如くイ音に呼べど、他の諸國にては、多くセー、メー、レーと、エを延ばしたる者に呼ぶ。是大に注意すべき點なりとす。

アイ音

此音は地方に隨ひ、種々の音にきこゆ。中國の三備にては、大會のダイクワイを、デエーケエー (Dyehkwo) の如く響かす。九州熊本邊にも、亦類似のケエー音あり。名古屋邊にも、之に似たる特種の音あり。名古屋人の音は、其後の方エーより寧ろヤーにきこゆ。即ち早のハイイをハイヤー (hayā) 苦のニガイとニギヤヤー (nigayā) といふが如し。東京にては、ハイイとハエイ (hayei) 大根のダイコンをダイコ (daiko) といふ。相模邊にては、早のハイとハイ (hay)。

前のマヘをマー (may) といふと、岡山音に似たれど、之に比すれば稍短かし。加賀越前の邊にては、サウカイをサウケと、口早にて短かくいふ。此等のアイの變化したる諸音、皆異なる所あれど、之を表はすべき適當の法なし。

以上に列記したるが如く、地方地方の發音を探り、其變化を正し行かば、殆ど底止する所なかるべし。今若し大地圖を描き、其上に種々の色取を以て、發音變化の配布を分ち行かば、或は意外の結果を生じ、竟には我祖先の移遷及び交通の迹を探り得るに至るべし。これ余が此學研究の大目的とす。余が不完全の材料を以て、臆測するも、發音上、山陰より北陸を経て、奥羽の西部に至れる種族と、山陽畿内に移れる種族と、濃尾參遠の地を経て、關東より奥羽に入れる種族とは、三大別を爲し居れるが如し。將來我歴史の攻究に對する豊富の材料、此方面に存するなり。

撥音と促音

我大和語の、一の特徴として見るべきは、其言は、縦りの上中下を問はず、皆母韻にて終ることなり。故に古へ支那音を借りて我音を寫すに當り、其撥音と促音とを以て、我平音を表はすを常とせり。支那語に三類の撥音促音あり、舌内音、唇内音、喉内音これなり。此三類と我假名と對照せば、舌内撥音はニス、同促音はナツ、唇内撥音はミム、同促音はフ、喉内撥音はイウ、同促音はキクなること、通例の用法なり。之を英字にて表はせば、舌内撥音は η 、同促音は η 、唇内撥音は μ 、同促音は μ 、喉内撥音は ω 、同促音は ω となり。左に我古書に載せたる地名を舉げて、假名の用法を示すべし。

舌内撥音

舌内促音

因幡

イナバ (sin donz)

設樂

シタラ (shet lak)

難波

ナニハ (nan pa)

謁叡

アチエ (at ye)

讀枝 サスキ (sau si)
雲飛 ウチビ (wun bi)

音伐 ハイホツ (pai fots)

信夫 シノブ (sin nu)

乙訓 オトクニ (ot kuni)

此舌音轉じて難行のタリルとなる

讀良 サラト (sara lang)

平郡 ベンリ (peng gin)

駿河 スンガ (sun ga)

唇内撥音

唇内促音

男信 ナマシナ (nam sin)

美談 ミタミ (mi tam)

甘樂 カムラ (kam lak)

南佐 ナノサ (nam sa)

愛甲 アユカハ (ai kyap)

揖保 イヒホ (ip po)

揖宿 イフスキ (ip shuki)

惠曇 エドモ (wei dom)

邑知 オホチ (op chi)

喉内撥音

喉内促音

相馬 サウマ (sang ma)

英多 アガタ (ang ta)

久良 クラギ (ku lang)

餘綾 ヨロギ (yo lang)

伊香 イカハ (i hang)

安宅 アタカ (ata ka)

佐伯 サヘキ (sa pyak)

託馬 ツクマ (tak ma)

喉内撥音のガギ等を利用して見れば、和名抄著述の頃には、其撥音の痕迹を留り居りたるは明かなり、此音ギより轉じてイに變はるものあり。

當麻 タイマ (tang ma)

英多 アイタ (ang ta)

此喉音其勢絶えんとして、下の言の頭に、其濁音を譲る例あり。

芳實 ハガ (fang ta) 養父 ヤブ (yang fu)
 撥音促音は、すべて何れの類を問はず、屢々省略せられて用ゐらるゝことあり。

安房 アハ (an yang) 能登 ノト (nong tong)
 寧樂 ナラ (nang lak) 甲斐 カヒ (kai hi)

多少の異例なきにあらざれど、古は漢字借音の用法、概して定まり居りたるが、何時の頃よりか、喉内音の *ン*、即ち *ㄱ* は、忘却せられて、之に當てたる *ッ* と *イ* のみ残り、又舌内音の *ㄴ* も、唇内音の *ㄹ* も出で來りしが、此舌唇の兩音も、後には相混じ、最初には *ㄴ* に當て、作られたる *ン* の假名も、後には區別なく、*ㄴ* と *ㄹ* とに代用するに至れり。

喉内撥音の *ン* となりしは、今は遍く人の知る所なるべきが、唯怪しむ、數年前余が之を述べしまでは、世間之に心付きたる者なかりしが如きを。

本居氏の漢字三音考を見るに、類りに我國の音の清朝なるを稱揚し、支那音を侏離缺舌なりとして排斥し、喉内撥音を以て、古音は *ウ* なりと斷定し、支那音は混濁にして鼻にかゝり、後世の唐音などにては、*ウ* を *ン* に響かし誤るに至りたりとて、甚しく之を鄙下し、我假名に寫したる *ウ* こそ、其原音なれとて、得意の論辯の記載あれど、是は誠に最負の引倒しにて、一種偏見の愛國論に類する、本國自慢は、却て其弱點を暴露するに當るなり、原音は決して *ウ* にあらず、支那の *ン* に對し、寫すに適當の字なく、策窮りて、已むを得ず、*ウ* を當てたるに過ぎず、三音考に左の一節あり。

或人云東の字漢音 *トン* なるを、此方にて *トゥ* とするは、*ン* の綴字未だ出來ざりし前に、*ウ* を *ン* に借りて、*トゥ* とつけたるなり、然るを今 *トラ* と呼ぶは誤なりと云へり、此說 *トゥ* を今 *トラ* と呼ぶを誤なりと云ふは、さることなれど、*ン* に *ウ* を借りてつけたりと云ふは非なり、若し然らば、

ン₁の韻の字、皆ウと假名をつくべきに、ン₂の韻は古より別にン₁の韻なるをや、凡て今の唐音を正しきものと心得るから、如此きひがこととも云ふなり。

これ全くン₁とン₂の區別を辨へざるより、此認説に陥りたるなり、本居氏が時代は、音韻の穿鑿に、其材料の不完全なりし時代なれば、此認説ある、收て深く咎むるに足らず、今より見れば、此の如き區別は、少し斯道の研究に心ある者は、容易く見出だし得べきものなるを。

唐音なりとて、ン₂音のグの失せたるにわらず、實は其響の隱微なりしより、ン₁をン₂に代へて、寫したるまでなり、行燈をアンドン、普請をフン、鈴をリン、獅をチンと書く類、即ちこれなり、尤も現今支那の南方に於いては、ngをnに、又反對にnをngに代ふる地方なきにあらず。

漢吳音圖の著者、太田全齋氏は、綿密なる考證の後、風₁の字、通雅に山西人

郷語讀むと分の如しとあり、又封₁の字、枕草紙に、紫の紙を包みてふんじとあるより、仄かにウのン₁に通ずるを悟り、其上唐音にても、ウはン₁なるより、喉内音を左の如く定めき。

東冬江陽唐庚耕の轉の字、ウの韻なれど、清宵蒸の韻にはイの韻もまじり、又唐韻はン₁の韻なり、因て此轉のウの韻はイとン₁に通ふウ也。

唐音にてもイはン₁なり、古へイの假名にて止めたるは、イン₁の如き、引きて接ねたる音の、寫しがたくして、ン₂を取りたるまでなり、即ち京の字の音、ケイン₂の如く響きたるを、ケイと寫したるが如し、これ太田氏の未だ考へ及ばざりし所なり。

太田氏の考證の學力は、實に敬服の外なし、一々文字につき、古書₁の用法を示し、忽にする所なきは、力めたりといふべし、今左に漢吳音圖微より、喉内音に屬する、文字の數例を取り、氏が研究の結果を示すべし。

鍾 〔萬葉集〕鍾禮シグレ。如今小盃をチヨクとよぶは即ち鍾の字なり。
 雙 〔延喜式〕雙栗神社、傍假字サグリ、栗は字音を用ゐたり、訓にあらず。
 當 〔和名抄〕雙六、俗云、須久呂久。

當 〔萬葉集〕山川之當都心(タギツコ、ロ)、大和の當麻、タギマ(古事記當
 岐麻)。

岩 〔和名抄〕岩野伊勢郡多木乃、愛岩山城郡於多岐。

相 〔和名抄〕相模、佐加三、相樂、山城郡佐加良加。

香 〔和名抄〕伊香近江郡伊加古、香美土佐郡加々美。

養 〔延喜式〕養布神社傍假字ヤギフ。

斯くまで、考證行届きたれど、只單にウをグに用ゐたるは、香山をカグヤ
 マといふ例など、のみ説きて、一步を進めて、ウはングに當てたる假名
 なるが故、ガギグゲゴに轉するなりと、斷言することを得ざりしは、恰も

船の港口に近づき、猶雲霧に遮られて、上陸すること能はざるが如き觀
 わり、事甚だ惜しむに堪へたり。

我古書の用法に、地名、人名、物名等に、漢字のン、音を利用したるは、其例
 多けれど、余が狹識なる、人の未だ此點に論及せし者ありしを聞かず。ウ
 のン、なりしは、擬聲文字の例も亦之を示す。

大雨滂沱 ハウダ又ホウダにあらず。パンクタ又ボンクタにて、パタ
 パタ又ボタボタの義なり。

鐵中録々 サウサウにあらず、金の聲のチャンクチャンクなり。

伐木丁々 丁、吳音チャウ、古音なり。丁々ハ斧の聲のチャンクチャン

クなり。丁ハ竹耕反とあるより、タクと讀むは、我五十音に泥みて、支

那の反切法を解せざるなり。又丁音争とあるより、丁をサウと讀む
 は、甚だしき誤讀なり。争は原音チャンクに近しと知るべし。

擊鼓連々　ダウダウ又ドウドウにあらす、ダン、ダン、又ドンド
 ン、なり、即ちドンドンの音なり。
 蟲飛葉々　コウコウにあらす、ホン、ホン、なり、即ち飛跳ぬる音な
 り。

諸聲字の組織も亦之を證す。

鐘　シヨウ、本音チヨング、其聲我方にて、チヤンといふと相類す。
 釘　吳音チヤウ、チヤン、チヤン、の聲に象りたるなり。

箏　サウ、本音ツヤン、又チヤン、なり。
 蜂　吳音フ、即ちフン、にて、其羽のブンブンの音なり。

鶯　アウ、嚶々のアウアウ、即チアング、アング、の聲に叶ふ。

此鳥の聲綿蠻ともきこゆと見ゆ。鶯は黃鳥にて、我國のウグヒスに
 あらず。

斯く精細かに、喉内撥音につき、述べ來りしは、其の既に忘却せられたる
 原音に關し、世人の注意を促すに過ぎざるのみ。

さて我國にて、撥音促音は如何にして現はれ來りしものなるか、本邦音
 語の自然の變化に基きて、しかる現象の出で來りしか、或は支那朝鮮の
 交通に由り、外國語の感化を被りしに基けるか、又或は奈良朝より平安
 朝に至り、文化大に開け行き、四方の人、相雜居し、相往來したるに由り、音
 聲の上に影響を及ぼし、其結果として、生じ來りたるものなるか、未だ詳
 かにすると能はずといへども、其頃の文書より、次第に撥音促音の使用
 を見るに至りたるは、明かなる事實なりとす。當時漢語の韻尾を寫すに、
 ニ、ム、ム、ナ、ツ、フ、キ、ク等の假名を用ゐたれど、實際は之を撥音促音に響
 かし居りたるとも、或はありたるなるべし。

現今の畿内音を以て、關東音に比するに、畿内は平坦にして母韻多く、尙

古代の大和語の痕迹を留むれど、關東は凹凸にして、撥音促音を以て満たさる。其音調粗野にきてゆるも是に由るなり。九州は多く喉内音を用ひ、重苦しくして雅ならず。特に促音勝にて、大和語の發音に適せず。關東九州共に大和語自然の發生地とは見做しがたし。想ふに、往古此等諸方の種族は、大和民族の征伐を受け、遂に之に服従して、固有の言語を捨て、大和語を採用したるにあらざるか。現今其地方の住者の、撥音促音多き、不自然の音を以て、大和語をわやつるは、蓋し其祖先を異にしたるに由るなるべし。九州に古言の殘存するとあるは人の知る所なれど、其は大和人種の傳へ殘したるものと、假想するを得べければ、敢て奇とするに足らざるなり。以上は固より學理に基づきたる考説にあらす。事餘りに大膽に過ぐれど、只余が腦頭に浮かみ出づる所の想像を記したるにて、古代の種族熊鷹、八十梟帥に仄かに想を寄せたるのみ。

兎にも角にも、諸方の人々の雜居交通は、音聲の變化に大影響を與へたるべきは、疑ふまでもなし。撥音促音の此雜交に由りて、勢を得、其流行の區域を擴むるに至りたりと思考するは、決して不當の推測にあらざるべし。撥音の最も勢あるはリ(ン)なり。ng(ン)は、言の下には現はるゝとなければ、言の中には、半濁音として、夙くより生じたるものゝ如し。昔し漢字を假名に寫し、時、相のナン(言)を相模に當て、囊のナン(nang)を以て美濃に當てたるは、本濁音のサガミ、ミナギにあらすして、半濁音のサガミ、ミナギなりしにはあらざりしか。若し然りしとせば、京音も既に東方音の感化を受け居りたるに似たり。元來、鼻聲は東方音の特徴なり。其喉内に少くして、北に進むに従ひ、現はるゝと次第に多く、奥羽に至れば、最も甚だしきを覺ゆるなり。今濁音のガギンゲゴに由りて推するに、九州及び中國の西部は本濁なり、中國の東部畿内、東海、東山兩道の太

部分は、其音の音の中或は下にゐるときは、半濁の呷即ちガゲグゴな
り、此呷即ちンノ音は、鼻音の痕迹を現はせるなり、南方の清音も、北方に
至れば、濁音又半濁音に變ずるとあり、例へば行くの音、大坂京都邊にて
は、ユク又イクにて、クは清音なり、東京邊にては、清音もあれど、多くはイ
グにて、其グは本濁音なり、朽木より福島邊に至れば、既にイグにて、グは
半濁のンノ音なり、此に至りて、奥羽の鼻聲現はれ出づるなり。
抑も我輩音の性質を考ふるに、其勢甚だ強く、しばしば他音を壓して、威
は之を脱着せしむることあり、或は之を融化せしめて、我方に引き付く
ることあり、或は之を我結合に便なる音に轉化せしむることあり、今左
に種々の場合を示すべし。

他音融化の例

彼様 アノヤウナル (ano yōnaru)

アenna (anna)

色々 イロイロナル (ironaru)

イロンナ (ironna)

旨々 ウマウマト (umamato)

マンマト (manmato)

母韻脱落の例

彼方 アナタ (anata)

アシタ (ata) 上カ

兄様 アニサマ (anisama)

アンサン (ansa) 鼻羽

何 ナニト (nani to)

ナント (nanto)

馬 イゾタヒソ (izokuniso)

イツクンソ (izokunso)

懸 チモゴロ (nemogoro)

チンゴロ (nemgoro)

殿 ドノ (dono)

ドン (don)

考 カムガナル (kamuganaru)

カンガンル (kangaruru)

犬子 イヌノコ (inunoko)

インノコ (inunoko)

右の如き母韻脱落のとき、トの清音を更へて、濁音に化せしむること多

簞	カミサシ (kamisashi)	カンザシ (kanzashi)
紙裂様	カミサキヨリ (kamisakiyor)	カンギンヨリ (kanzenyori)
公達	キミタチ (kimitachi)	キンダチ (kindachi)
弓手	ユミテ (yumite)	ユンデ (yunde)
踏張	フミハル (fumiharu)	フンバシ (funbaru)
紙袋	カミフクロ (kamifukuro)	カンブクろ (kambukuro)
何程	ナニホド (nanihodo)	ナンボ (nanbo)
東	ヒムカシ (himukashi)	ヒンガシ (hingashi)
諸	ソラニスル (soranisuru)	ソランズル (soranzuru)
就中	ナカニツク (nakanitaku)	ナカンヅク (nakanadzuku)
汝	ナムチ (namuchi)	ナンジ (nanji)

無止事 ヤムロトナキ (yamukotonaki) ヤンボトナキ (yango-tonaki)
 他音を撥音に變ずる例。

羅行の音は其下に、奈行或は麻行の音あるときは、撥音となる。是は、の
 發音稍々困難なるより、下のロ或はmの引き付けて落したるなり。

如件	クダリノボトシ (kudarinogotoshi)	クダシノボトシ (kudashinogotoshi)
垂	ナリナントス (narinantosu)	ナンナントス (nannantosu)
鼻	ヲハリヌ (owarinu)	ヲハシヌ (owashinu)
盛	サカリナリ (sakarinari)	サカシナリ (sakashinari)
夜御殿	ヨルノオトシ (yorunootoshi)	ヨシノオトシ (yoshinootoshi)
有	アルメリ (arumeri)	アンメリ (annumeri)
其	ソレナラ (sorenara)	ソシナラ (soshinara)
勿爲	ナサルナ (nasarina)	ナサンナ (nasanna)

右の場合に下を濁音に變へて軟聲となしたる例もあり。

無_二撥 ヨリトコロナキ (yoritokoronaki) ヨンデコロナキ (yondokoronaki)

無_二取手 トリテモナキ (toritemonaki) トンデモナキ (tondemonaki)

乍_レ併 ケンド (keredo) ケンド (kendo)

泥_二龜 ドロカメ (dorokame) ドンガメ (dongame)

波行の音は、清濁共に撥音に變はることあり、此場合に下の音濁音となるを常とす、唇音調和のため、上には_二音あるとき、下の_レを_レにかゝることもあり。

問屋 トヒヤ (tohya) トンヤ (tonya)

惟 オモヒミル (omohimiru) オモンミル (omomimiru)

慮 オモヒハカル (omohihakaru) オモンハカル (omomihakaru)

顔 カホハセ (kahohase) カンハセ (kanhase)

殆 ホトホト (hotohoto) ホトンヤ (hotondo)

主水 モヒトリ (mohitorij) モンデ (mondo)

藏人 クラヒト (kurahito) クランド (kurando)

延氣 ノビキ (nobiki) ノンキ (nonki)

呼來 ヨビテクル (yobitekuru) ヨンデクル (yondekuru)

右羅行波行二類の外、尙撥音に化せられて、其音の變はるものあり。

撥取 カヂトリ (kajitori) カンダリ (kandori)

馨 カグハシキ (kaguwashiki) カンバシキ (kanbashiki)

輕 カロクスル (karokusuru) カロンズル (karonzuru)

疎 ウトクスル (utokusuru) ウトンズル (utonzuru)

劈 ツキサク (tsukisaku) ツンザク (tsunzaku)

差出 サシダス (sashidasu) サンダス (sandasu)

打郷 ブチナグル (Buchinaguru) ブンナグル (bunnaguru)

我國人の撥音を好むこと、以上の例の如し、關東人、奥羽人の俗語につき、尙細かに探究せば、其音に屬する言の數の、許多なるに驚くべし。腹が立ッは、腹ン立ッ(ガはng)何ノ事ダは、何ノコンダ、上ガレは、アンガレ、鬼は、ウンサヤ、成ラナイは、ナンチイときこゆるが如き、其類の多き數ふるに違あらず。

單に語勢を助くるがためのみに、撥音の多く用ゐらるゝを見ても、其の大に本邦の人に歓迎せらるゝを知るべし。

眞中	マナカ	マンナカ
鉦	カナ	カンナ
眞圓	ママル	マンマル
餘	アマリ	アンマリ

黙 下 爺 婆 雄鳥 雌鳥 杯 既 底 度

ダマリ	ダンマリ
カジキ	カンジキ
トジリ	ドンジリ
クダリ	クンダリ
ヂイ	ヂンヂイ
ババ	バンバア
ヲトリ	ヲンドリ
メトリ	メンドリ
ナド	ナンド
スデニ	スンヂニ
トビ	トンビ
タビ	タンビ

夜

ヨベ

六十六

赤坊

アカバウ

ヨンベ

黒坊

クロバウ

アカンバウ

青藏

アラザウ

クロンバウ

言

イハバ

アランザウ

善

ヨシ

イハンバ

ヨシンバ

普通人の心付かざる所なれど、我言語に、軟聲を下に用ゐ、清音を濁音に變ふる癖あるは、またソの音を好むと同様の趣味にて、其傾向の萌芽と見るも不可なる所なかるべし。

巻紙

マキカミ

マキガミ

小島

ヲシマ

ヲジマ

火箸

ヒバシ

ヒバシ

山鳥

ヤマトリ

ヤマドリ

促音の方は、何れの時代より盛んに行はれ始めたるか、未だ知らずといへども、是は撥音の入聲なれば、其と同時に出来たりとするも、敢て奇とするに足らず、促音は早き頃より、漢文の讀方には、用ゐられ居りたるが如し、此音東國九州流行の音なり。

促音となるは硬聲ク(ト)ツ(ト)プ(ト)の三種なり、何れにもソの字を用ゐる慣例なれど、其は理に合はず、本居氏は、漢字三音考に於て、入聲の促音は、ソの符號を使用せり、これ甚だ善し、ソをnmの兩撥音に用ゐるが如く、余はソをよとp三類の促音に用ゐるべし。

促音とは、兩字相重なるとき、下の字の音に引かれて、上の字、母韻を失ひ、是がために、促まりたる音といふなり、しかして、其の最も落ち易き母韻は、ウとイとなり、これこの兩母韻の響の弱きに由るなり、上下共に同じ

父音なるときは、單に母韻を落とし、異なる父音なるときは、母韻を落しすのみならず、下の父音に引き付けて、上の父音を化せしむると常とす。又語勢に由りて、兩父音共に變化するともあり。

同父促音の例

勝手 カツラ (katsura)

突懸 ツキカクル (tsukikakuru)

カッタ (katta)

異父促音の例

ツツカクル (tsutsukakuru)

切先 キリサキ (kirisaki)

引断 ヒキチギル (hikichigiru)

迷惑 オヒカクル (oikakuru)

打殺 ブチコロス (buchikorosu)

キッサキ (kissaki)

ヒチチギル (hichigiru)

オッカクル (okkakuru)

ブッコロス (bukkorosu)

兩父變形促音

引張 ヒキハル (hikiharu)

振裂 カキサク (kakisaku)

ヒッハル (hipparu)

カッサク (katsaku)

ウの母韻の落つるは、漢語の促音に多し。

北海 ホクカイ (hokukai)

雜誌 ザッシ (zasshi)

鐵砲 テッパウ (teppou)

合羽 カフハ (kafuha)

ホッカイ (hokkai)

ザッシ (zasshi)

テッパウ (teppou)

カフハ (kafuha)

稀には、俗語にオの母韻の落つる例あり。

葦様 トロサン (otosan)

事也 コトダ (kotoda)

トッサン (totsan)

コッタ (kotta)

語勢を助くるがために父音を添へ、促音の形にて發音すること例多し。

全 マタタ

マッタタ

專

モハラ

モハラ

最

モトモ

モットモ

徳利

トクリ

トックリ

判然

ハキト

ハッキリト

襖樓

ボロキレ

ボロッキレ

矢張

ヤハリ

ヤッバリ

確

シカト

シッカト

澤山

ドサリ

ドッサリ

關聯にて長く引く音に對し、關東にて促音を用ゐること常なり。

笑

ワラフテ

ワラッテ

父様

オトツサン

オトツッサン

母様

オカアサン

オッカサン

オツカは、カの方の促音を、上のオの方に移したるなり。

關西の撥音、關東の促音となることあり。

坊

ボンサン

ボッチヤン

南天のナンテンを、東京にてナルテンといひ、京都にてナツタンといふは、前例の反對に似たる奇なる變化なり。

現今の本邦語には、撥音促音の勢力、此の如く大なり。將來東京を以て、文學の中心となし、其關東音、全國に傳播するに至らば、愈々其勢力の増加を見るに至るべし。我國發音轉化の經歷を研究せんとする者は、深く此に注意すべき所なりとす。

明治三十年四月草す

音便の説

音便とは音轉の義にて、其假名遣には、原音の假名を取らずして、轉じたる音の假名を用ゐるを常とす、音便の主なるものは、**ク**音便、**フ**音便、**ム**音便、**ス**音便なり。

ク音便

加行の父音**ク**は、口を開き、舌の後部を上げ、息を上唇に觸れしめて、出だす音なり、我**ク**音は、獨逸語、支那語の如く、強きにあらず、然れども、此**ク**は歐洲語などの如く、脱落つることあり、これ舌の後部を上ぐる勞を省くより、唇音自然に喉音に變じ、母韻のみ響くに至るなり、此音便、**ウ**(**ウ**)と**イ**(**イ**)に多きは、**ウ**と**イ**の兩母韻は、其力弱く、口内の中部又前部にて、軽く響き、他の音の後に來るとき、自ら父音の**ク**(**ク**)と伴はずして、相離るゝに由

るなり。假名遣の諸書に、カウブル(冠)を、カ、ブルの、k略の音便と爲すは、余は取らず。是はカブルの長聲音便なるべし。

格子	カクシ (kakushi)	カウシ (kaushi)
冊子	サクシ (sakushi)	サウシ (saushi)
電	ヒヤク (hyaku)	ヒヤウ (hyau)
早	ハヤク (hayaku)	ハヤウ (hayau)
朔日	ツキタチ (tsukitachi)	ツイタチ (sautachi)
刃	ヤキバ (yakiba)	ヤイバ (yaiba)
於	オキテ (okite)	オイテ (oite)
阿責	サキナム (sakinamu)	サイナム (sainamu)

f 音便 h 音便

古く、波行の父音は、唇音にして、今の如きh音にわらざりし證あり。此唇

音w(ウ)に近かゝりしと見え、今も言の中或は下にありて、ア又オの母韻と伴ふ時、ワ又ヲの音と紛ふとあり、而して此ウ音は、純粹なる合唇のwにもあらず又開口にて發する母韻の、uにもあらずして、輕き口内の音なりしが如し、此唇音又鼻聲に通ひて、モヒト(主水)をモンド、トヒヤ(間屋)をトンヤといふが如く、ロ(ン)に轉ずるとあり、これフヨリウとなり、更に又ンとなるなり、其の口内のウに變せんとする時、其下は來る母韻を引きつけて、之に同化せしむるとあり、之をfの音便と唱ふ。

皮葺	カハタケ (kafatake)	カウタケ (kautateke)
箒	ハハキ (hafaki)	ハウキ (hauki)
妹	イモビト (imobito)	イモウト (imouto)
兄	セビト (sebito)	セウト (seuto)
間而	トヒテ (tohite)	トウト (toute)

候	サフラフ (sufurafu)	サウラフ (saurafu)
事	ツカハマツル (tsukahematsuru)	ツカウマツル (tsukau matsuru)
類	ホ、(fofo)	ホウ (fou)

f は實は半唇音なれば、適當の記號にはあらず、只假に、我波行の唇音に當て、用ゐたるのみ、其音便となる場合は、w と記する方、寧ろ宜しかるべし。

近世に至り、何時の頃よりか、口を開いて、ハヒフヘホを唱ふるに至り、フを除くの外は、唇音と變じ、始めて h 音となりて、稍 k 音に近づき來り、遂に k の如く母韻のみを遺して、脱落するに至れるなり、只異なる所は、我 h は k の如き強き唇音にあらず、而して其發音嚴正ならざるるとき、他の音の後に隨ひては、弱母のウ(ロイ(i)のみならず、オ(o)エ(e)とも離れて、失去るとあり、獨りアの母韻は其開口に聊か勢を要するが故、他の音に接し

て、其勢を受くるるとき、h は全く脱落せずして、w に近き聲とはなり、フの響を生ずるなり、ワキウエマの、フの外、w 音を失ひしも、其説明觀同様なり、是に由りても、h と w の相近かりしを知るべし。

k 音便には、母音の假名を用ゐるを許すとせば、h 音便にも之を許して、差支わるべし等なし、然るに左の例の如きは、上の方のみを用ゐて、下の方を許さず。

幸	サイハヒ (saihahi)	サイワイ (saiwai)
扇	アフギ (ahugi)	アウギ (augi)
鶯	ウグヒス (uguhisu)	ウグイス (uguisu)
家	イヘ (ihe)	イエ (ie)
通	トホリ (tohori)	トオリ (toori)

此は別に理由のなきとなり、h 音便は、平安朝の古法なれば、寧ろ宜し、h 音

便は近世の新法なれば排斥するといふは、一に古書のみ拘泥して、他を顧みざる、和學者の陋見と謂ふべし。然れども、今日家をイエ、露をウグイヌと書くと能はざるは、世上多數決の定むる所にして、是亦風俗習慣の壓制の一例なりといふべきか。

ㄇ 音便

ㄇ 音便は f 音便と能く相類似す、其説明も亦粗同様なり、ㄇ は w に移りて、母音を同化し、ウの響を生ずるに至るなり。

賜	タマハル (tamaharu)	タウハル (tauharu)
頭	カミベ (kamibe)	カウベ (kaube)
小路	コミチ (komichi)	コウチ (kouji)
總	オムナ (omuna)	オウナ (ouna)
柑字	カムシ (kannushi)	カウジ (kanji)

將有 アラム (aramu)

アラウ (arau)

f 音便にても、m 音便にても、w 音よりウに化せらるゝは、畢竟母韻の響の弱さに基づくことと知るべし。f 音便と m 音便と、少しく異なる所あるは、m の w に變はらんとする時、尙其本性を失はざるに由り、弱き母韻を同化して後、其下の音に接し、之を常に濁音に變ふるとなり。これ撥音と濁音の連聲法なり。

右の外、ㄇ 音便あり、是は m 音便に類す。

因	ムズル (muzuru)	コウズル (kouzuru)
---	--------------	----------------

ㄥ 音便あり、ㄥ の發音を避くるに基づく。

取出	トリヂ (toride)	トウヂ (toude)
----	--------------	-------------

w 音便あり、其説明 f 音便に同じ。

麥出	マキヂ (mawide)	マウヂ (maude)
----	--------------	-------------

申 マラス (marasu)

マウス (mausu)

s 音便

此音便は、シのイとなるのみに限る。左行の父音は、s なりしかゆなりしか、未だ詳かならずといへども、唇撮音を嫌ひて、少しく齒頭より息を吹出だす勢を省けば、イの母韻弱くして、之を留むる力なく。又此は自づから脱落するなり。

朝 アシタ (ashita)

アイク (aika)

塞 サムシ (samushi)

サムイ (samui)

況 マシテ (mashite)

マイテ (maite)

明治二十九年四月草す

ハヒフヘホ 古音考

我國に於て昔五十音の假字を作りしとき、アイウエオの母韻を基とし、之に牙齒舌唇等の父音を添へて、各行に字を設け、縦横に配列したるは、蓋し悉曇の呼方に因りたるなるべく、又其父音の分類も、其當時の呼方に基きしと論を俟たず、然るに今日に於ては、配列の順序こそ、昔と同一けれ、同行にありて、同父音に屬すべきものながら、尙其呼聲の異なるものあり、古來唇音と唱へられたるハヒフヘホの如きは、即ち其一なり、余が聞知する所に由れば、九州山陰の一部分、北陸奥羽の大部分を除きては、ハヒヘホの四字、其呼聲、全國今は唇音にあらずして、寧ろ腭音と名くる方適せるが如し、古はさにあらずして、此の父音、現今のフに屬する父音の如く、軽く吹きたる息の、兩唇の間より出づる音なりしなるべし、即

ち之を今九州山陰北陸奥羽の諸國にて用ゐる音と見れば、大差なかるべし。ハヒヘホの四字、唇音にあらすして、眞の唇音なりしと、證左多し。

我五十音と同じく、悉曇の呼方に隨ひ、漢字音聲の分類を定めたる、韻鏡を正すに、唇音に重輕の二種あり、各々之を清音、次清音、濁音、清濁音の四類に分ち、其字母、第一種の方を幫、滂、並、明とし、第二種の方を非、敷、奉、微とす。之を英字の音に比し、次清音は、出氣音なれば、其肩に標記を付して示せば、幫は p、滂は p、並は b、明は m に當り、非は f、敷は f、奉は v に當り、微は v 又は w に近き音なりと知るべし。

重唇音 p は純粹の清音なり、我國に、昔此音なし、故に幫母に屬する巴、卑、布、邊、蓮の如き、皆唇音ハヒフヘホの假名を以て寫したり、後にはバビブベボを以て、此音を寫すに至りたれど、其は全く近來の事なり、此音清音なれば、普通唱ふるが如く、半濁音と呼ぶべき理由あるとなし、出氣音の p

も亦寫すに法なかりしが故、滂母に屬する頗、披、昔、片、鋪の如きも、又ハヒフヘホの假名を以てせり、濁音 b 即ち並母に屬する文字は、バビブベボを以てし、清濁音 m 即ち明母に屬する文字は、マミムメモを以てし、此二類の音は、寫すに差支なかりしなり。

輕唇音に至りては、其清音は、我古音と類似の音なりしならんか、今は之をフハフヒフヘフホの如く表はせど、古はかゝる必要なかりしなり、清音 f 即ち非母に屬する文字、養、非、付、分、封等には、ハヒフヘホの父音之に適し、出氣音 f 即ち敷母に屬する文字、芳、妃、敷、峯、拂等にも、已むを得ざるより、又寫すに此假名を以てせり、濁音 v 即ち奉母に屬する文字には、此音なきにより、バビブベボを當て、清濁音の微屬に屬する文字には、又此音なきにより、バビブベボ或はマミムメモを使用せり。

以上重唇輕唇二種の支那音を寫すに、ハヒフヘホの假名を用ゐたりと

せば、此父音唇音なりしと疑ふべき所にあらず。若し左にあらずして、ハヒへホをして、今日の如き腭音ならしめば、支那傳來の唇音を寫すに、甚だ不適當なりしならん。

尙進んで支那音を質すに、其喉音に影、曉、匣、喻の四類あり、影母はアイウエオに當り、曉母は之を寫すに適當の音なかりしなり。此曉母は、英のハに當れど、我には昔時之に對するハ音なかりしといふは、現今差支なく、ハヒへホの腭音を有する處より考ふれば、太だ奇なりと謂ふべし。匣母は影母の出氣音にして、時に或はハ音の如く聞こゆ。喻母はY又Wの音なり。

斯く支那音を比較し來りて、我が當時の音を考ふるに、支那人の強く響かすハ音に對し、寫すに適當の字なく、ハヒフへホは、唇音なりしを以て、無論用ゐ難く、遂に苦心の後、ハ音と、其縁最も近き、ト音を以て之に代用

し、カキクケコを以て、其位置に當てたるなり。故に曉母に屬する海、漢、呵、喜、兄の如き、ハイ、ハン、ハ、ヒ、ヘイ、と書かずして、カイ、カン、カ、キ、ケイと書きたるなり。現今にても、此等は皆、支那にては、依然としてハ音なれば、往古我國人の、已むを得ずして、ト音に改めて書寫したるとは、容易く了解せらるべし。上海をシャンハイといひ、漢口をハンカウといひ、喜馬拉耶をヒマラヤといひ、帥兄をスヒンといひ、呵々をハ、といふが如きは、即ち其例なり。出氣音の匣母も、亦稍ハ音に近きを以て、是亦多くはカキクケコにて書寫せり。下、戸、潰、痕、寒の類は今も尙寫すに適當の假名なければ、其眞音はカ、コ、クワイ、コン、カンのト音にはあらざるなり。此轉音を辨知すれば、何故に、黄河はクワウカと書けど、フワソクホなるや、又何故に、匈奴は、キョウドと書けど、ヒュンツヌにて、後のハンスなりや、理由を問はずして、自から首肯することを得べし。又我國にて漢音吳音の二種に、假

名を付するに當り、一見しては、甚だ解し難く思はるゝものも、子細に音
を正し來れば、自ら明かに悟り得べきものあり、即ち和の字漢音クワに
して、吳音ワとなり、會の字漢音クワイにして、吳音エとなる類の如し、和
の漢音は *kwai* にあらずして、*hwa* なるが故、容易く *wa* となり、會の漢音は
kwai にあらずして *kwai* なるが故、又 *kwai* となり、再轉して *kwai* となるなり、エ
は元 *wo* 音の假名なり。

ハヒフへホは、音の中或は下にあるときは、屢々濁音バビブベボに變ず
ることあり、バビブベボは純粹の唇音なり、故に其清音ハヒフへホも亦、
唇音ならざるを得ず。

日本橋 ニホンパン

大宮人 オホミヤビト

身振 ミヅリ

山邊 ヤマベ

頬骨 ホウボ子

是等は平常普通の轉音にして、奇とすべき所なきが如しといへども、尙
聊か考慮を費せば、容易く其理を説明することを得べし。ハヒフへホは、
前に述べたる如く、兩唇の中間より、軽く息の出づるに由りて、生ずる音
なり、之に濁音を與へ、一たび唇を閉ざして、後之を開けば、自らバビブベ
ボの音を生ず、故に別に勞を費やすことなく、僅かなる語氣の差異にて、清
唇音は濁唇音に變ずるなり、ハヒフへホは今の關東關西諸國の音の如
く口を開いて唱ふる唇音なりとせば、其濁音は如何なる類のものなり
しならんか、寧ろガギグゲゴに近くして、バビブベボには遠かりしなる
べし。

ハヒフへホの音便法も、亦其古音の唇音なりしを示す。此説前に既に述
べたるに由り、畧して再び擧げず。

以上の外、ハヒフへホの唇音なりしといふ、最も確實なる證據は、九州山

陰北陸奥羽の諸國に於いて、尙此音の流行を見るとなり、是蓋し古音の存じたるものにして、之を證するに、辯明を用ゐる必要なかるべし。

明治二十九年十二月草す

附記

本年一月帝國文學所載の、上田万年氏の「語學創見」に P 音考あり、ハヒフヘホの古音 P なるを證す、然れども、是は既に人の唱へし所にて、創見といふべきにあらず。

其論據を擧ぐれば、左の如し。

第一、清濁音韻の關係より、濁音 B に對し清音を P と定む、これ H にもあらず、F にもあらず、悉曇韻學支那韻鏡學の上にて、P の清と B の濁と相對するを見ても悟るべし。

其清音を H なりしと主張する者は、左の四問の答辯を求む。

(一)古説に逆行を唇音とせるは如何なる謬か。

(二)何故に今日の如き喉的 H 音が濁る必要ありたるか。

(三)よし濁る必要ありたりとするも、喉的 H 音が濁るに臨みて、何故に唇的濁音とはなりたるか。

(四)濁音 B は清音 P のさきだつ事なしに存在せしか。

其清音を P なりしと主張する者は、左の二項の答辯を求む。

(一) V 音の存在すると。

(二) V 音の B 音に變せざると。

第二、H 音は古き音にあらざると。

(一)梵漢音傳來の時、我國に H の喉音なかりしと。

(二)梵漢の H は K を以て寫したると。

第三、アイエに入りし日本語の事。

アイヌ語に P F H の三音あり、然るに我ハヒフヘホに對し、彼の P を用ゐたる例あり。

第四、上古の音は、熟語的促音及び方言の上に存すると。

上田氏の論に對して、本年二月國學院雜誌上に、三矢重松氏の批評あり、其說採るべきあり、採るべからざるあり、冗長に流るゝ恐あるを以て、其は省きて此處に擧げず。

上田氏が論據の第一段に、濁と清とを比し、D に對して T あり、G に對して K あり、故に B に對して P なかるべからずとするは、論理上否むべき所なし、之を韻鏡に徵するに、支那語には、P に對する B、F に對する V ありて、清濁の別ありしと顯著なり、氏が H 音說主唱者に對する挑戦も、亦力ありてきこゆ、余に於いては、古音の H 音ならざりしは、始より諾ふ所なれど、然れども之を P ならざるべからずと斷定するに於いては、餘り

に論理的の見解に過ぎたるにあらずや、P ありて B なき言語は實際に存在す、之に反して、B ありて P なき言語ありとするも、何の妨かあらん、又韻鏡の重唇濁音 B を、我方にてバビブベボにて寫したりとて、其重唇清音 P を寫したるは、ッハッヒフッヘッホなるべきも、また等しくハヒフヘホなるにあらずや、濁音の方も、重唇音輕唇音 B V の別なく、共にバビブベボなりしを見れば、我濁唇音は、果して強き合唇音の B なりしか、是も聊か疑なきと能はず、此邊矢野氏が上田氏に對する非難、稍明かならざれば、亦同様の論なるが如く覺ゆ、但し用例の、風福伏膚父拂粉翻反髮煩、方凡法覆發等は、韻鏡にては覆の字を除く外は、皆輕唇音にて、決して P にあらず、拂翻は次清にして F、伏父煩風は濁にして V、他は皆 F なり、此等の諸文字、皆今の支那音にて H なりとは、福州音にてもあるか、それに

ても未だ當らず、碩學上田氏に對し、右の如き證例は餘りに杜撰に過ぐる様思はる。

次に上田氏は、F音說主唱者に對ひ、我國に其濁音Vの存在と、VのBに變はりしとの證明を要求せらる。余は先づ韻鏡の輕唇音が、英語のF、Vの如き半唇音なりしか、潛かに之を疑ふ、我古音の半唇音にあらざるべかりしは、矢野氏も之を説き、余も亦再三之を論せり、此音強き合唇音にもわらず、又半唇音にもわらざりしとせば、清の方はFとは同じからず、隨つて濁の方、Vの存在を説明する必要なかるべし、但し矢野氏の如く、波行を喉唇など、唱ふるは、余は之を取らざるなり、HはKに近き喉音（余は之を母韻と分ち、唇音と名づく、是は guttural sound なり）なり、只我Hは、其聲強からざるのみ、此點に於いては、余は固より上田氏の説を重んず、唇音の後世に至り、唇音に變はり來りしは、其原因言ふまでもなく、開口

の儘にて發音し、唇を用ゐる勞を省きたるに由るなり。

上田氏又曰く、Fは小兒すらも發し得易き音にて、諸國今何處にても、之を擬聲語（オノマトピア）に用ゐる所なるに、上古其發音に苦しみしといふは、不思議なりと、之に對しては、矢野氏が論難常れるが如し、古の平易なりし音、今は困難なるあり、今の平易なる音、古は困難なりしともあるべきは、言語の變遷に伴ひて、數の免れがたき所なり、況して我唇音の古音はFに近かりしとせば、後に變じて純粹のP出で來りしとするも、決して不當の見解とはいふべからず。

Pの由、或はDに移り、又更にHに轉じたるは、奈良朝前後の事なるべしとは、上田氏の説なり、奈良朝は未だ委しく知らず、平安朝の音便法に、ハヒフヘホのウに通ふを見れば、此唇音一時輕きウ音に移りたるにて、其の重き合唇のPならざりしを示す、而して、其の且に轉じたるは、遙かに

近世の事なりとす。是は何時頃よりハヒフヘホの、アイウエオ又ツヰウ
 エヲと混同するに至りたるか、之を探りて後、證するを得べし。和學者
 が古音便には古法に隨ひて、母韻のみを記するを許し、ハ、音便には之を
 許さざるを見て、其の近代の事なるを推し得べし。ハヒフヘホが、ツヰ
 ウエヲに移るといふはいかゞ。音便にて脱落ち、ア(ワ)イウエオに移るは、
 自然なれど、ハがWに變はるといふは、其順序法に合ひたるものなりや。
 ハよりWに移るは順なれど、既に開口呼となりたる、ハよりWに轉する
 は逆なるべし。實際上此間に、稍理由あるが如く思はるゝは、ハの唇々ワ
 となるとなり、ヒフヘホ皆ハを落とし、ハのみ獨りW音となるは訝しき
 所なり。其理を察するに、ハは脱けんとして、アの母韻強く、是がために全
 く落つると能はず。然るに前より連聲の勢を受けたる結果ハは其位置
 に達せずして發せんとし、W音とはなることなるべし。俗語には、ハのハ

を捨てたる例多し、コレハ、コレハ (koreha koreha) は、コレワ、コレワ (korewa
 korewa) とならずして、コレア、コレア (korea korea) 又稍變じてコリヤ、コリヤ
 (korja korja) となるが如し。口語にては、ホも折々ワの響に變はるとあり。
 上田氏が第二の論據、Hを古音にあらすとせられしは、余の全然同意す
 る所なり。梵漢のHを、我はKを以て寫したりと言ふ説、確實にして、難す
 べき所にあらず。然るに矢田氏は、支那音の牙喉往來を以て、疑の種と爲
 すが如く見ゆれど、若し然りとせば、是未だ音韻の道に、精しからずとい
 ふべし。

第三段の、我唇音のアイヌ語に入りて、Pとなりし證は、アイヌ語には日
 本語の訛りたるもの多ければ、十分と見做すこと能はず。

第四段の、促音に、古音のPの存在すといふ證は、其價值甚だ少く、人を服
 せしむるに足らず。又沖縄薩摩九州の南部に、p又Pの存在すといふは、

別にP音説の證とはならず。

終りに曰ふ、余は我ハヒフヘホの古音の、希臘のΦ、獨逸のV(古音)の如き
 卍類似の音なるべかりしを信ず、余が此意見單獨ならんかと思ひ居り
 しに、矢田氏の論を見るに、全く相符合するが如し、余は此に於いて、同説
 の友を得たるを喜ぶ。

タチツテト古音考

タチツテトは、元來、母韻^{matr. vowels}と、父音^{pat. vowels}と合してなれる音なれば、正式
 の組立にしたがへば、無論^{matr. vowels}なるべきを、今の音、チツの二字羅
 馬字にて表はせば^{matr. vowels}の響なるは、甚だ怪むべし、此二音古より然り
 しか、將、中世以後の轉音なるか、特に研究を要すべき事なりとす、然るに
 發音は、時代と共に變遷するものなれば、今日の音を以て、既に形迹の絶
 えたる古音を判断するは、標準の頼るべき所なく、其の説く所、自ら正鵠
 を失するに至るべし、しかして、今にありては、此の明かならざる問題に、
 多少の光を與ふるものは、當時傳來の支那音との對照是なり。

今爰に比較せんとするは、ハヒフヘホ古音考に示したるが如く、韻鏡の
 音なれど、之に先だち、注意すべきは、我古書に、我音を寫すに借用ゝられ

判すること能はず、第二十五轉、第四等、翹、鳥、夷は *tiaw, hau, hau, hau*、挑、眺、驪は *tiaw, hau, hau*、なるべしと思へど、共にチャウ又たはテウと書きてあり、是れ稍ニビナの關係を知るに足るべし、第三十五轉、第四等、丁、頂、訂は吳音 *tiang, liang, liang*、漢音 *teng, teng, teng*、今の官話 *tung, ting, ting*、汀、冥、聽は、吳音 *tiang, tiang, tiang*、漢音 *teng, teng, teng*、官話 *ting, tiang, ting*、なれを假名にては、吳音チャウ、漢音テイ、古書の用法にては、テに當り、此類皆ニの音ならず、是に由りて察すれば、ナにニの音ありしが如し、然れども是のみにては、論證薄弱にして、ナはニなりしか、ニなりしか、未だ十分斷定を下すこと能はず、更に退いて、消極の方面より考ふれば、我古音にニの音の存在せしは、疑はしと思はるゝ所あり、左に之を示さん。

韻鏡の齒音に、齒頭、正齒の二種あり、齒頭の方は、其字母、清は精にして、英のニ次清は清にして、マの音なり、正齒の方は、其字母、清は照にして、ニ次清は穿にして、ミの音なり、通例此正齒音をニにて表はせど、斯くては、舌上音との區別相立ち難し、正齒音は齒に觸れて出で、舌上音は舌の中部上聘に接して生ずる音なれば、兩者其響太だ相近しといへども、其間に區別を設けざるは不可なりとす。

齒頭正齒の支那音は、我方にては、サシスセンの假名を以て寫すを例とす、試に之を古書に、シの音にあてゝ用ゐたる漢字に徴するに、資、玆、子、志、此、次、紫等は、齒頭音にして、ミ若しくはニの音なり、之、芝、旨、叱、士、仕、示、等は、正齒音にして、ミ若しくはニの音なり、古よりナの音、今の轉の如くなりしとせば、此等の漢字はシの音に當てずして、ナの音に當つべき筈なり、齒頭音は姑く措き、ニ音と密接なる關係を有する、正齒音の文字を以て比するに、前に舉げたるものゝ外、今のナの音に隨へば、者のサ、又シヤはチャ、主珠のス、又シユはチュ、春のス、又シユンはチュン、制のセ、又セイ

はチエイ、諸のツ。又シヨはチヨと書くこと適當なるべし。葦、掌、障、又は昌、飲、唱、のシヤウは、チャウとなり、爭、諍、壯、莊の漢音サウ、吳音シヤウは、ツアウとチャウとにて、其音の互に相近きを知るべし。

又象聲文字の音について考ふれば、鏡中録々の録の字、漢音サウ、吳音シヤウ、之ヲツアング又チャングと改むれば金の聲となる。伐木丁々の丁の字、舌上音に屬し、吳音チャウなり、是即ちチャングにて、能く斧の音に適ふ。此字に音註争とあり、争は正齒音に屬し、是もツアング又チャングなり、因りて知る、舌上音と正齒音とは、相近くして屢々相通へるとを、字彙に、中の字、陟隆切音終、又其去聲は之仲切音衆とあり、本字は韻鏡に由れば、舌上音なるに、音註は正齒音なり、又反切の父音も、陟は舌上音なるに、之は正齒音なり、斯の如く、舌上正齒兩音の相通へるは、前の丁と争との關係の如し、之を本居氏が漢字三音考に於て辯ずるが如く、一概に訛謬なりとして排斥すべからず。

舌上音と正齒音とは、既に相近しとせば、支那音傳來の當時、舌上音のみを以て、特に我々に當て、何ぞ正齒音を以て其縁の稍隔たりたるシに當てたる、意ふに當時我國に_一音なく、_二は_三の音なりし故、舌音を以て之に配し、シの方には齒音を以て偶せしなるべし、濁音の方を正せば、古書デに當てたる漢字は、地泥、治、尼、貳の類なり、此内地泥は舌頭音_三、治、尼は舌上音_二、貳は半齒音_三なり、此音の漢字、多くは開合第三等に位し、舌上音に屬す、第四等にありては、_二のデとなる、清音_二のテとなるが如し、舌上音と正齒音との關係は、_二と_三との關係にして、清音_二と_三を比して論じたる時と同様なれば、重ねて此處に説くことを略す、_二の音なりとせば、_二は無論_二の音ならざるべからず。

次に移りてツの音に及ぶべし、之に當てたる漢字、都、闕、通、鬼、苑、屠は舌頭

音に屬し、*ミ*又*メ*の音なり、因りて案ずるに、古のツは、今の如き*ミ*にあらずして、*タ*(*ミ*)、*テ*(*ミ*)、*ト*(*ミ*)と其組立を同じうする、單音*ミ*なりしなるべし、是は誠に略易き道理なり、往昔我に*ミ*の音ありたりとせば何を苦しんで齒頭音精、清、從の字母に屬する文字を、サシスセソの假名に用ゐたる、細かに檢し來れば、*ス*の音に當てたる、周、酒、取、州の如きは、皆ツユの音なれば、ツの音に當つべき筈なり、然るに此法を行はざりしは、當時我に*ミ*の音なかりし證なり、

地名に漢字と假名と左の如き對照あり、

敦賀 ツルカ (turu ka)

駿河 スルカ (suru ka)

右の用法を見ても、*ミ*に當つるにツを以てし、*ミ*に當つるにスを以てしたるを悟るべし、

濁音の方は如何ん、ヅの音に用ゐたる漢字は、頭、豆、途、圖、徒にして、皆舌頭音の定母に屬する文字なり、しかして其本音は皆*ミ*にして、*ミ*にあらず、*ミ*は齒頭音從母の音なり、然るに此位置の字をザジズゼゾに用ゐたるは、取りも直さず當時我に此音なかりしを證す、古のヅは*ミ*の音なりしと疑ふべからず、

曾て四國の或る部分に*ミ**メ*の兩音の今も尙残り居るといふとを聽得たるとあるが、未だ其信譌を辨せず、是は音韻學上大に穿鑿を要すべき事なり、

明治二十九年十二月草す、

明治三十一年七月廿三日印刷
同 年七月廿六日發行



定價金貳拾錢

著者 大島正健

神奈川県下高座郡海老名村大字
中新田千五百二十九番地

發行者 山縣悌三郎

東京府下北豊島郡巢鴨町
大字上駒込村拾八及拾九番地

印刷者 中西美重藏

同郷町區内幸町一丁目五番地

印刷所 ジャパン・タイムス社

同郷町區内幸町一丁目五番地

發行所 東京府下北豊島郡巢鴨町大
字上駒込村拾八及拾九番地
内外出版・協會

東京獨立雜誌

社會、政治、文學、科學、教育、并々
 教上の諸問題を正直に、自由に大膽
 に評論討論す。確信にあらざれば語
 らず、獨特の思想を含有せざる寄書
 は載せず、熟讀せざる書は評せず、正
 直と認めざる廣告は掲げず、而して
 本誌載録の記事に對しては、主筆内
 村鑑三并に持主山縣悌三郎悉く其言
 責に任す。

毎月二回發行
 定價 金五錢、十部制金四十五錢
 郵税 一部五厘、爲替拂渡郵便局

發行所 東京府下北豊島郡上駒込村
 拾八及拾九番地
東京獨立雜誌社
(電話番號本局四百三十八番)

大島正健著
漢字と假名 定價金十五錢
 郵税二錢

古は漢語漢字の弊害と其矯正策及び假名使用法に
 つき著者獨創の意見を發表したる書なり
發行所 内外出版協會

大島正健著
支那古韻考 前編 定價金三拾錢
 郵税金六錢

右ハ著者ガ多年ノ研究ノ後支那帝國三千年來、韻
 字變遷ノ迹ヲ探リ、精細ナル考證ニ由リ、之ニ先人
 未發ノ見解ヲ附シタル書ナリ。此編無尾韻ノ部ニ
 止マル。
 後編有尾韻ノ部近刊。全編ヲ通ジテ、日本支那諸大
 家ノ説キ及バザル所ヲ説キ、悉ク新説ヨリ成ルト
 謂フモ可ナリ。此書出デ、始メテ多年人ノ疑問ニ
 屬スル古韻ノ說確定ス。其價值ノ有無ハ、世
 間具眼ノ士ノ評ニ一任ス。
發行所 丸善株式會社書店
東京日本橋區通三丁目

音韻漫錄附錄

主要なる正誤

四十五頁十一行	イナバ (inaba)	(inaba)
五十七頁八行	サガミ、ミナギ	サガミ、ミナギ
五十八頁一行	ガギグ、グゴ	ガギグ、グゴ
同 五行	イグ	イグ
六十頁十二行	ナンジ	ナンヂ
六十七頁八行	ソの符號	ソの符號
以下促音のツは總べて		
七十頁九行	關聯	關西
同 十行	ワラフテ	ワラウテ

八十三頁八行	出氣音!	P。
八十九頁六行	P。	P。
九十一頁四行	輕唇清音P	F。
九十一頁八行以下	矢田氏	三。矢。氏
同 十一行	風。	凡。
九十二頁九行	喉唇	喉唇音。
百頁一行	爽。	弟。
百二頁六行	字。	字。
百三頁八行	デとなる。	と。
百四頁九行	ツルカ (tsuruka)	(tsuruka)
同 十行	スルカ (suruka)	(suruka)